

## 〔研究報告〕

## ナイチンゲールのヴィジョン——女性救済者と瀕死の女性

木村 正子

## Nightingale's Vision—a Female Christ and the Dying Woman

Masako Kimura

## 要旨

本稿はフロレンス・ナイチンゲールの自伝的エッセイ「カサンドラ」(1852)をフェミニズムの視座から読み解き、彼女が提示する「女性救済者」と「瀕死の女性」の二つのヴィジョンが意味するものを読み解くものである。

研究方法としては、まず「カサンドラ」における女性の苦境とその原因、そこからの救済の希求について考察し、次に彼女と同時代の作家、エリザベス・ギヤスケルおよびジョージ・エリオットの作品に見られる女性の救済(者)のモデルを傍証として検証する。最後に、「女性救済者」および「瀕死の女性」のヴィジョンのゆくえを探るため、ナイチンゲールの「クリミア」以後の作品『看護覚え書』(1860)の中に「カサンドラ」の主張からの影響を吟味する。これによって、「カサンドラ」でのヴィジョンは本作品単体で完結するものではなく、以後の作品の布石となっている点が明らかになる。

『看護覚え書』でのナイチンゲールが精力的かつ能動的な姿勢を示すのに対し、「カサンドラ」での彼女は悲観的であり受身的な姿勢に甘んじている。彼女はヴィクトリア朝の社会慣習に縛られる女性たちの内なる叫びを代弁し、女性が「情熱、知性、道徳的行動」という資質を持ちながらもそれを活かせる場がないこと、そして女性を男性の支配下におく当時の社会システムを批判しつつも、他者による救済(女性救済者の登場)を希求している。だがその願いもむなしく、「カサンドラ」は唐突に「瀕死の女性」のヴィジョンを提示して作品を終えてしまう。〈死〉のヴィジョンの導入は救済の放棄を意味するのか、あるいはこの〈死〉は救済に結びつくのかという疑問が生じるが、彼女は明確な答えを示していない。そこでギヤスケルとエリオットの作品から女性の救済(者)モデルを傍証として、ナイチンゲールのヴィジョンを考察すると、〈死による救済〉という解釈によって前述の二つのヴィジョンが繋がることになる。そして「カサンドラ」と『看護覚え書』との間テキスト性から、「カサンドラ」の〈死〉は、ナイチンゲールのクリミアでの活動の布石となるべきもの、すなわち因習に縛られた過去の自己の崩壊を表象するとも考えられ、後に彼女は『看護覚え書』に見られるような力強いボイスを得たといえる。

キーワード：ナイチンゲール、「カサンドラ」、『看護覚え書』、「女性救済者」、「瀕死の女性」

“The next Christ will perhaps be a female Christ,”  
 (“Cassandra,” 1852, p. 53) (注1)

“THE DYING WOMAN to her mourners: ‘Oh! if you knew  
 how gladly I leave this life. . . .’” (C, p. 54)

## I. はじめに

フロレンス・ナイチンゲールは、クリミア戦争(1853-56)における看護活動により一躍その名が知られるようになった。

『タイムズ』紙は、スクタリの野戦病院での彼女を「ランプを掲げるレディ」として讃え(注2)、その記事からインスピレーションを得たアメリカの詩人ヘンリ・ワズワース・ロングフェローは、「サンタ・フィロメナ」(“Santa Filomena” 1857)と題する詩を発表した(注3)。これらが表象するナイチンゲール像には戦地における救済者のイメージが伴い、当時のイングランドの理想的女性像である〈家庭の天使〉(自己抑制と他者への献身を旨とする女性)像とも一致した。それゆ

えナイチンゲールのイメージはイングランド女性の鑑としての宣伝効果をも併せ持っていたといえる。

しかし戦地での活発な行動およびジャーナリズムによる外的イメージとは対照的に、ナイチンゲールの「クリミア」以前の生活は、社会慣習という檻に閉じ込められ、精神的に追い詰められるものであった。自伝的エッセイ「カサンドラ」(“Cassandra” 1852)の中で彼女が、「なぜ女性は情熱、知性、道徳的活動性を持ちながら、社会においてそれらを実行する場を持つことができないのか」(C, p. 25)と訴えているように、当時の女性は感情を抑制し、知的教育よりも社交術を身に着けることを求められ、また道徳意識は高くともそれを社会活動に活かすことは許されなかったことが窺える。たとえば感情の高まりである「情熱」は淪落に繋がるとみなされ、「母は娘に、女性には情熱がないと教え」(C, p. 26)、娘は「情熱など持つてはいないと嘘をつかねばならない」(C, p. 26)とナイチンゲールは述べている。このような偽善的な振る舞いもまた〈家庭の天使〉のライフスタイルが持つ側面であり、〈家庭の天使〉像は、社会規範から逸脱することのないよう女性に自主規制を課す力をも含有していた。「カサンドラ」でのナイチンゲールはこの状況にはっきりと否を突きつけているのである。

このナイチンゲールの主張の中にフェミニズムの要素を見出したのが、20世紀後半の批評家エレイン・ショウォルターである。生前のナイチンゲールはフェミニズム運動とは距離を置いていたが、彼女の著述はウルストンクラフトからウルフに連なるフェミニズム(第一波)の中間地点にあたるというショウォルターの指摘(1981, p. 396)によって、「カサンドラ」にフェミニスト批評家の注目が集まった。その中で本稿が重要視するのは、後のナイチンゲールの社会活動の基盤に、キリスト教的博愛精神のみならず(当時の女性にとって唯一の社会活動は教会が主催する慈善活動であった)、男性優位社会における女性救済の希求があったという点である。これは本稿の目的である、「カサンドラ」での二つのヴィジョン——エピグラフに掲げた「女性救済者(キリスト)」(a female Christ)と「瀕死の女性」(THE DYING WOMAN)——の意味を読み解くにあたり、重要な手がかりなると思われるからである。

そこで本稿の研究手法として、フェミニズムの視点から「カサンドラ」を精読し、最初に本作品における女性の苦境とその原因、そこからの救済の希求について考察する。次に

傍証として、同時代の女性作家エリザベス・ギヤスケルおよびジョージ・エリオットの作品における女性の救済と女性救済者のモデルを検証する。そして最後に、これら二つのヴィジョンのゆくえを検証するべく、ナイチンゲールの「クリミア」以後の作品『看護覚え書』(Notes on Nursing 1860)の中に「カサンドラ」との共通点を探る。それは、これらのヴィジョンが「カサンドラ」という単一の作品内で完結するものではなく、彼女の以後の作品にも何らかの影響を与えていると考えられるからである。

まず「女性救済者」のヴィジョンでは、救済対象となる女性の具体的状況、救済の方法、そして救済者としてどのような存在が想定されているのかについての議論が必要である。次に、ナイチンゲールは女性救済者の到来を希求しながらも、突然「瀕死の女性」のヴィジョンを提示し、その女性の辞世の言葉によって作品の結末とした点を照射する。論点は、救済/救済者の希求は「死」のイメージによって無に帰すのか、救済は放棄されたと解釈すべきなのか、あるいは本作品での死のイメージには別の意味が付加されていて、救済に繋がるのかである。

そして議論に先立ち明記しておかねばならないのは、「カサンドラ」という作品は統一したテーマを持たず、著者が断片的に書きとめたものをアンソロジー的に編纂した体を成しており、各主張が単なる断言や提案のみで終わる、具体的な説明が不足した抽象的な記述にとどまる、あるいは同じテーマを繰り返しや冗漫な論述が散見されるといった欠点を抱えている点である。たとえば女性救済者にしても、ナイチンゲールの主眼が、女性の救済者と、女性救済を対象とする救済者のどちらにあるのかについては一貫性を欠いている。もし女性の救済が主眼であれば、男性支配のもとで不利な立場に置かれた女性の救済を旨とするフェミニズム的要素が強いが、救済者の性別が女性であるだけなら、博愛主義的活動の範疇に入る。因みに後年の活動を鑑みると、看護師の育成など女性の活動を推奨していることから、ナイチンゲールにとっては、救済対象の性別よりも救済活動そのものが優先課題であったと考えられる。そこで女性による救済活動および女性対象の救済を照射すれば、これは同時代のギヤスケルやエリオットの作品が提示する救済(者)モデルとも符合し、ナイチンゲールの考えもまたその時代および社会の要求を反映したものとみなせる。このようにナイチンゲールの記述に不十分な点や曖昧な点がある場合、他の

女性作家の作品を検証することで補填できる可能性があり、同時にナイチンゲールが影響を受けたと考えられる当時の社会的背景や文化的側面を知ることができる。

## II. 「カサンドラ」における女性の苦境とその理由、そして救済（者）の希求

「カサンドラ」の執筆時期とされる1852年頃、ナイチンゲールはすでにカイザースヴェルトでの研修を経て看護職に携わっていた。だが本作品には看護に関することは一切言及されず、また女性には活動（action）の機会がないという不満に溢れていることから、実際の執筆時期はもう少し以前ではないかと推察される。執筆時の彼女は、女性の活動を妨げるものは男性が支配する社会および社会慣習であることを認識し、この状況は人間よりも上位に存在する神の意図とは異なる点を訴えている。以下がその主張の個所である。

It seems as if the female spirit of the world were mourning everlastingly over blessings, *not* lost, but which she has never had, and which, in her discouragement she feels that she never will have, they are so off.

The more complete a woman's organization, the more she will feel it, till at last there shall arise a woman, who will resume, in her own soul, all the sufferings of her race, and that woman will be the Savior of her race.

Jesus Christ raised women above the condition of mere slave, mere ministers to the passions of the man, raised them by this sympathy, to be ministers of God. He gave them moral activity. But the Age, the World, Humanity, must give them the means to exercise this moral activity, must give them intellectual cultivation, spheres of action. (C, pp. 49-50)

引用によると、女性は「祝福」が得られないため、「女性という有機的統一体」が「完全」な状態ではないが、その「祝福」は喪失したのではなく、女性には手が届かない存在である。しかもそれは神による采配ではなく、「この世」すなわち人為的な所作に起因すると指摘されているが、その解決策が見つからずに女性は失意に陥っている。完全な状態を取り戻せば、女性も同性の苦しみを共有し、「同性の救済者」となれるのだと、ナイチンゲールは主張する。し

かし現状では本来（人間として男性と同様に）神の僕となるはずの女性は「単なる奴隷状態にあり、男性の情欲（注4）の対象でしかない」と彼女は嘆いているのである。

このように男性の行為の客体でしかない女性の立場を憂えるナイチンゲールは、結婚にも否定的であり、「本当の結婚——男女がともに完全な存在となるための気高い結びつき——はおそらく現在の世の中には存在しない」（C, p. 44）と述べている。ここでも「完全」ではないことに不満が向けられているように、ナイチンゲールが望むものは「完全」さであるが、それは人間より上位にある神が意図した世界、存在、事象に見られるものである。にもかかわらず、彼女をとりまく社会環境は父権制という男性優位のシステムに支配され、その中で女性は常に男性より下位に位置し、「女性には自分の時間と呼べるものは30分もない」（C, p. 34）という言葉に集約されるように、女性は自立して単独で生きることすら容認されない。

このような女性の立場に関しては、ギヤスケルも『シャーロット・ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë* 1857）で、男性は行動する（do）ことを期待されているが、女性はただそこにいる（be）だけ」（原文では傍点部分はイタリック体）（LCB, p. 197）という表現で、女性は家庭および社会双方での弱者であることを訴えている。「カサンドラ」では“do”の代わりに“act”（C, p. 53）という語が使用されているが、いずれの場合も、社会は女性が行動することを想定していないため、女性は行動的でありたいと願っても、受身的にならざるを得ない状況であることを裏づけている。

このジェンダーによる機会獲得の差異こそ、まさにフェミニストによる批判的であり、ナイチンゲールの時代にも、女性に男性と同じ教育や権利、職業を与えるべきだという議論が高まっていた。だがそれが結実するのは20世紀を待たねばならない。ウルフが「女性が作家になるためにはお金と自分の部屋が必要だ」（AR, p. 31）と主張したのは1929年であるが、その時代にもまだ、女性は〈家庭の天使〉であるべしというヴィクトリア朝の既成概念が残っていた。ウルフは、女性（作家）に対し社会は「人間関係、道徳、性について自由にまた公然と扱うことを許さない」（DM, p. 151）ため、「女性作家の仕事の一つは、家庭の天使を殺すことである」（DM, p. 151）と宣言したのである。ナイチンゲールの著述はこれらのウルフの主張を半世紀以上も先駆けていたわけで、あらためて、ナイチンゲールの主張がウ

ルストンクラフトとウルフの中間点に位置するというショウォルターの指摘(前述の指摘を参照)が的を射たものだとわかる。

このように外の世界だけでなく家庭内においても制約を受ける女性は、ひたすら他者への献身だけを求められるばかりだというのが、ナイチンゲールから見た〈家庭の天使〉の生き方であり、彼女はこのような状況に対して「気が狂いそうだ」(C, p. 43)と述べている。だからこそナイチンゲールは「カサンドラ」の中で、女性たちがこの苦境から救出されることを切実に求めていたのである。だが看過してはならないのは、彼女は女性の苦しみの原因が男性社会にあるとみなす一方で、男性の権威や権力を容認する許す女性たちにも怒りの矛先を向けており、男性のみを非難的にしているわけではない点である。

ナイチンゲールが「もし過去のキリストが女性であれば、大いに不満を言うだけだっただろう」(C, p. 53)とも述べているように、女性は救済者という立場にいたとしても、当時の社会規範は、女性が行動することを容赦しなかったと推定される。フェミニスト批評家の中にはジュリエット・ミッチェルのように、ジャック・ラカン(精神分析学者)の説をもとにして、言語そのものが男性の領域に属するゆえ、女性の言語は幼児語やヒステリーの言葉であると主張するケースもある(2000, p. 389)。ミッチェルの主張では、女性の「不満」も重要な言語活動であるが、「不満」は意味を伝えるための発話ではなく、単なる音の響きに収斂してしまうことは十分あり得る。発話行為において意味が伝わらないのであれば、それはギリシア神話/悲劇に登場する預言者カサンドラの言葉と同じく(トロイの王女カサンドラは、アポロン神の求愛を拒否したため、予言の力を持ちながら、その予言を信じる者は皆無であると運命づけられた)、聞き手不在の発話となる。ギリシア古典に通じていたナイチンゲールが、作品のタイトルに「カサンドラ」の名を冠したのは偶然ではないだろう。もし彼女が、「カサンドラ」における主張もカサンドラ王女の言葉と同様無に帰すという前提で書いたのであれば、「女性救済者」のヴィジョンが「瀕死の女性」のヴィジョンに取って代わるのも当然の帰結である。

しかし男性に服従する女性にも憤りを感じているナイチンゲールのスタンスを考えると、「救済」を諦めて「死」を受け入れたとみなすのは早急ではないか。というのも、「カサンドラ」の語り手(ナイチンゲールの分身でもある)が不満に終始するのは対照的に、『看護覚え書』の語り手は、

女性に対して積極的に行動を起こすように叱咤している。『看護覚え書』に関する議論は後にあらためて行うが、この作品では救済に対する姿勢が、他者によって救出される受身的なものから、自分で救済の方法を見出す、あるいは自ら救済者となる能動的なものに転換していることが明らかである。両作品の執筆時期はクリミアでの看護活動の前後にあたり、当地での活動がナイチンゲールに多大な影響を及ぼしたことは容易に推察できる。だが同時に、女性救済者および女性の救済という構想は彼女独自のものではなく、当時の社会の中にすでにその萌芽が存在していた点をも考慮すべきであろう。そこで次節では、ギヤスケルの『ルース』(Ruth 1853)とエリオットの『ロモラ』(Romola 1863)を取り上げて、両作家が作品の中で提示する救済(者)モデルを検証し、当時の文学が表象する〈救済〉と〈救済者〉、そして〈死〉について考察する。

### Ⅲ. ギヤスケルとエリオットが提示する救済(者)モデル

『ルース』の出版は1853年、ナイチンゲールがクリミアに出発する前年のことである。この作品は当時の女性作家にはタブーとされていたテーマである〈墮ちた女〉をヒロインとする物語で、社会的な罪に問われるルースが贖罪を経て社会復帰を果たす物語である。女性の貞潔が厳しく管理されていた当時、これが女性作家の作品のテーマとして適切でないことはギヤスケルも認識しており、友人への書簡にもそう記している(Chapple et al, 1997, p. 220)。だがそのタブーにあえて切り込むギヤスケルの姿勢からは、女性を救うのは女性であるという強いメッセージを読み取ることが可能である。

ルースの淪落の原因は、彼女を婚外関係に巻き込んだ恋人にもあるはずだが、ヴィクトリア朝の社会は、それを「女性の人生の問題」(RU, p. 35)と称して、すべて女性の自己責任の事柄であるとみなした。ギヤスケルが問題視するのは、まさにこの性に関する二重規範であり、彼女はルースの救済策を講じるにあたり、ルースの贖罪プロットと同時に、ルースの行動を観察する人々が新たな認識を得る(淪落した女性を娼婦と同列にみなして排除する考えを払拭する)プロットを構築した。当時のフィクションでは、淪落した女性の末路はコミュニティ追放か死というのが常套的手段であったのに対し、ギヤスケルは一般家庭でのルースの更生を試みた点で画期的である。ところが、ルースは社会復帰後、

伝染病罹患のため死亡するという結末になり、結局ギヤスケルも当時の慣習の壁を打破できなかったのである。

この結末に関しては、シャーロット・ブロンテやエリザベス・ブラウニングなど同時期に人気を博していた女性作家たちが批判的な意見を出している（LCB, p. 475; Uglow, 1993, p. 340）。しかしナイチンゲールは、『ルース』が「とても美しい物語で、6年前に初めて読んだ時よりも感動した」（Cook, 1919, p. 500）と述べているように、ルースの死に異論を唱えておらず、ルースの死を当時の文学的慣習として受け入れたようである。そこで「カサンドラ」のヴィジョンも同様に考えれば、「女性救済者」はヴィクトリア朝の男性優位社会では容認されない存在であり、またナイチンゲールが求める女性の「情熱」「知性」「道徳的活動性」（前述の引用参照）も同様に社会慣習が許容しない資質である以上、彼女の救済（者）モデルは受容されないという結論に行き着く。そうするとナイチンゲールも、ギヤスケルと同じく社会慣習に屈して、「瀕死の女性」のヴィジョンによって社会規範からの逸脱を回避したということになる。当時『ルース』をはじめ（随ちた女）の物語は、未婚女性の淪落を防止する警告の役割をも担っており、ナイチンゲールもそれを無視できなかったといえる。

そこでもう一つの救済（者）モデルである、エリオットの『ロモラ』を取り上げよう。『ロモラ』の出版当時（1863年）、ナイチンゲールのクリミアでの活動はすでに知れ渡っており、また彼女とエリオットは知己の間柄にあり、ロモラの活動とナイチンゲールの活動を相似させる解釈もある（Rignall, 2000, p. 288; Uglow, 1987, p. 206）。しかしエリオットは作品の舞台を15世紀のフィレンツェに設定し、ロモラの社会活動を可能にするために、彼女を本拠地であるフィレンツェから出奔させ、異郷の地での救済活動に従事させている。これは、ロモラの物語をヴィクトリア朝女性の物語の枠組から外すための作者の戦略であろう。物語の中でのロモラは救済の対象ではないが、翻って考えると、ロモラの社会活動は、家庭という私的領域に閉じこもる女性を戸外での活動に参入させる機会を示唆するものであるから、「カサンドラ」の苦悩する女性の視点から見れば、女性の救済プランの示唆ともいえる。

ロモラの社会活動には特筆すべき点が二つあり、一つはそれが異郷の地で本格化すること、二つ目はよそ者のロモラが村人に受け入れられるために、彼女が村の子供を抱く

姿を見せることである。彼女の仕事はフィレンツェであれ、異郷の地であれ同種（病人の世話や食事の手伝い、あるいはそれらの指示を出すこと）であるが、彼女の立場は大きく異なっている。フィレンツェでのロモラはバルディ家の令嬢でありティートの妻というように、男性の保護／監督者に付随したものであったのに対して、異郷の地でのロモラはコミュニティの指導者として自立し、聖職者からも一目を置かれる存在になっている。これは、ロモラが字義通り「目に見える聖母（The Visible Madonna）」（『ロモラ』第44章のタイトルであり、実際にロモラが村人に見せた姿を表現する言葉でもある）として解釈されたことによる。

しかし聖母マリアには、旧約聖書のモーゼのようにイスラエル民族のエジプト脱出を導くというような英雄的行動を起こすことは期待されていない。異郷の地でのロモラの活動は家事および慈善活動の延長上にあるが、逆説的に言えば、男性の領域を侵害しない活動であることを強調するために、エリオットが〈聖母マリア〉というアイコンとそれに伴うイメージを使用したといえる。もしロモラがヴィクトリア朝女性の規範から逸脱すれば、たとえば「カサンドラ」のように男性優位社会に対して不満を漏らすような場面があれば、女性作家の作品のヒロインとしてふさわしくないと、文壇からの批判を浴びることは想像に難くない。小説家となる前、エリオットは『ウェストミンスター・レビュー』誌に多くの書評を寄稿しており、その経験から、文壇や読者の反応が作家や作品に及ぼす影響を十分に熟知していたであろう。だがこのエリオットの戦略ゆえに、ロモラの社会活動は保守的な活動に見えてしまい、ジョン・リグノールが指摘するように、ロモラの救済活動が「クリミア戦争時にナイチンゲールが示したような、女性による奉仕の活動の中で達成しうるものを反映したもの」（2000, p. 288）となり、エリオットもナイチンゲールも当時のジェンダーの壁を超えられなかったという解釈になる。

一方、この作品に対するナイチンゲールの反応となると、彼女はサヴォナローラ（1458-98、実在した宗教改革者で異端の罪で火刑に処される）の描写に関心を寄せており、ロモラに関しては何もコメントを残していない（注5）。だがここで、ロモラの救済活動とサヴォナローラの殉教（死）を対置させ、ナイチンゲールが後者に興味を持つということになれば、彼女は〈救済〉よりも〈死〉に注目していたといえる。ただしその死は殉教であり、「カサンドラ」では殉教は神に近づく手段であると述べられている。ナイチンゲールが批判

するのは麻痺して何も感じない状態であるから、逆に「人間のために苦しむ」のは「キリストと殉教者の特権」(C, p. 30)であり、「苦しめば苦しむほど／祝福が早く訪れる」(C, p. 29)というわけである。ならば、長らく苦しみ抜いた女性の描写の後に登場する「瀕死の女性」のヴィジョンもまた「死＝沈黙」のメタファーではなく、〈死による救済〉という意味を帯びると考えてよいのではないか。総じて、20世紀後半以降のフェミニスト批評家による解釈では、ヴィクトリア朝小説のヒロインの死は救いのメタファーであるから、その視座から見ても、「カサンドラ」の「瀕死の女性」の〈死〉は救済措置であるという解釈に矛盾はない。

そうすると「カサンドラ」の「女性救済者」と「瀕死の女性」は、互いに矛盾する意味を提示するヴィジョンとして対置されつつも、最終的に両者は〈死による救済〉というメタファーを適用することで一つに繋がる。そしてこれらのヴィジョンを本作品単体で考えるなら、「カサンドラ」の結末は、ヴィクトリア朝ヒロインの物語の結末に即応したものといえるだろう。

しかしながら、ナイチンゲールという作家のヴィジョンとしてとらえた場合には、彼女が次の作品でどのようなヴィジョンを展開するのかを無視するわけにはいかない。そこで次に、彼女がクリミアから帰国後に現地での経験を活かして執筆した『看護覚え書』を取り上げて、「カサンドラ」でのヴィジョンのゆくえを追ってみたい。

#### IV. 「カサンドラ」と『看護覚え書』の間テキスト性から見るナイチンゲールのヴィジョン

まず、「瀕死の女性」の辞世の言葉の引用を見てみよう。

THE DYING WOMAN to her mourners:— “Oh! If you knew how gladly I leave this life, how much more courage I feel to take the chance of another, than of anything I see before me in this, you would put on your wedding-clothes instead of mourning for me!” (C, p. 54)

“Free—free—oh! divine freedom, art thou come at last? Welcome, beautiful death!”

Let neither name nor date be placed on her grave, still less the expression of regret or of admiration; but simply the words, “I believe in God.” (C, p. 55)

ここで「瀕死の女性」は彼女の死を嘆く人々に対して、自分は死を喜んで受け入れようとしており、その死は「神聖なる自由」であり「美しき死」であると断言している。前述のように、彼女の死が救済措置としての死であると解釈すれば、それは「哀悼 (mourning)」ではなく祝祭 (“put on wedding-clothes”) 的であるというのも納得がいく。

しかし「カサンドラ」でナイチンゲールが死を受託したとはいえ、この作品が公式に出版されるのは1928年で、すでに彼女は故人となっていた。別言すると、ナイチンゲールは「カサンドラ」を執筆したものの、生涯これを封印したままだったのである(注6)。一方クリミアでの看護活動を経た後、彼女は看護をはじめ公衆衛生、神秘学、哲学など多分野での著述を精力的に発表し、公的領域での発言の場を確保している。これを「カサンドラ」での記述に対応させると、「なぜ今湧き上がるヒロイズムを、錆びて朽ちてしまいうまかせず活用できないのか」(C, p. 36)と女性たちを叱咤する姿勢になり、警告の内容を行動に移しているといえる。

そこで『看護覚え書』のある挿話に注目してみよう。新鮮な空気が病室に入らないために病気が人を殺めてしまう物語が、狂気の男が肺病患者の喉を掻き切るという比喻によって語られている。これは当時流行していたセンセーション小説仕立ての語りを使用することで、読者の注意喚起をする狙いがあったと考えられるが、ナイチンゲールは、社会慣習に対する批判やまたその慣習によって苦境を強いられる女性の苦悩を記述するのではなく、ターゲットとなる読者を想定し(本作品では看護人)、苦境に陥る(罹患する)前に予防策を講じるべきだという警告を発している。彼女の批判は、「猩紅熱」や「熱病と病院瘵疽」が間近に迫っていることを「嗅ぎつけながら (nose)」(NN, p. 9)、それらの侵入を防ぐ手立てを講じなかった看護人の怠慢(「換気不足でかび臭い、日の当たらない部屋」のまま放置したことなど NN, p. 9)に向けられているが、これを「カサンドラ」との間テキスト性(テキスト間相互関連性)で考えれば、社会慣習の命ずるままに立ち居振る舞う人たち、特に女性たちの振る舞いに対する批判に相当する。ナイチンゲールは『看護覚え書』の中で真っ先に換気の必要性を訴えるが、それは、窓を開けるという行動を怠れば人間の心身に害をもたらす結果を招くという悪しき事例の紹介だけでなく、「カサンドラ」で閉塞的な空間に閉じこもる女性に対して、自ら窓を開ける行動を起こすように警告を発しているのである。彼女が、

罹患の原因として、病気という他者からの襲撃よりも、その他者の侵入を予防しなかった看護人の怠慢を重要視しているのは明らかである。

このように『看護覚え書』では語り手が作品全体を支配しうる力を持ち、愚かな振る舞いによって過ちを繰り返すなど述べて、死による救いではなく、この世での生を求めている。この語り手の力の源は、作者であるナイチンゲールが「カサンドラ」の執筆を経て得たものであると想定すると、「カサンドラ」という作品は、因習的なものに服従する自己を壊して新しい自己を構築する準備を整える過程を描いたもの、すなわちメタフィクション的作品として位置づけられるだろう。確かに「カサンドラ」は封印されたが、その作品の執筆を経て培った力はナイチンゲール自身の精神的成長（不満をこぼすだけの受身的姿勢から、看護活動に従事する能動的姿勢への変化）を可能にし、後に彼女は自分のボイスを確立することになった。その成果が『看護覚え書』の語り手に反映されていることは言うまでもない。

## V. 結び

「カサンドラ」における二つのヴィジョン、「女性救済者」と「瀕死の女性」からは、ヴィクトリア朝女性の苦悩とそこからの救済の希求、そしてその結末という一連の流れを読み取ることができる。これらのヴィジョンは一見相矛盾する意味を提示するが、〈死による救済〉のメタファーによって一つに結びつく。〈死による救済〉は、ナイチンゲールが自身を既存の社会慣習から解放する手段であり、同時に当時の女性作家たちと共有する解放手段でもある。ギヤスケルの淪落のヒロイン、ルースはヴィクトリア朝社会で生きる場を確保できなかつたために、この方法によって苦しみから解放された。一方エリオットのヒロイン、ロモラはサヴォナローラの殉教に倣うことなく、異郷の地で彼女の信じるやり方で救済活動を行った。思想的には昔のサヴォナローラを尊敬しつつも、彼女は現前する場で生きることを選んだのである。

この二つの救済（者）モデルとナイチンゲールのライフスタイルを比較すると、「カサンドラ」のナイチンゲールはルースやサヴォナローラのように〈死による救済〉を求めているが、『看護覚え書』の彼女はロモラのように生を肯定していることがわかる。前述のように、ナイチンゲールが公式に述べたコメントはサヴォナローラの描写を賞賛するものだが、『看護覚え書』の語りは殉教的な死を賞賛するものではない。このよ

うに「カサンドラ」で提示されたヴィジョンは「カサンドラ」の中で完結するのではなく、後の『看護覚え書』にその余波が見られることを看過すべきではない。そして間テクスト性からナイチンゲールのヴィジョンを解釈する必要があることをあらためて強調したい。

結局、ナイチンゲールによる「女性救済者」は、女性の救済者が主眼であり、救済対象を女性に限定する必要はない。だが同時に、彼女の救済活動の基盤となっているのは、ヴィクトリア朝社会の中で生きづらさを感じている女性たちを救済したいと望む気持ちであり、その点では、彼女の主張にあるフェミニスト的要素（男性支配の拒否とそこからの脱出）を否定する理由はないのである。だがナイチンゲールには、フェミニズム運動よりも、彼女自身が動くこと（action）に強い関心と執着があった。また複数の伝記（注7）が伝えるように、彼女はスクタリの野戦病院にて政府高官や聖職者（戦場への看護師の派遣は教会が行っていた）との駆け引きにも長けており、知的活動の面でも男性に比肩する力を有していたことが窺われる。そうすると、『看護覚え書』の語り手（ナイチンゲールの影響を受けている“I”）の姿勢がトップダウン式の男性支配の相似形であること、そして彼女の実人生での活動の場がフェミニストたちとの協働の場ではなく、むしろ男性社会の中で彼女自身が指導者として社会活動を統括する場であったことも驚くべきことではない。

しかしナイチンゲール自身の意図がどうであれ、結果的に彼女の活動が一般女性の職業領域の拡大と地位向上に貢献することになったことは確かである。ゲイル・ターレイ・ヒューストンは、ナイチンゲールは救済者の登場を希求していたが、結果的には彼女自身がキリストの役割を担って社会活動の指導者になった（2013, p. 120）と指摘しているが、「カサンドラ」から『看護覚え書』に至る流れを鑑みると、この見解は有効であろう。ナイチンゲールが希求する次世代の女性キリストは不満家ではなく、自身のボイスを持つ指導者であることは間違いない。

## 注

1. 本稿では一時資料（文学作品）からの引用については、以後作品名の省略形と頁のみを（ ）内に記す。対象作品は、AR (*A Room of One's Own*), C (“Cassandra”), DM (*The Death of the Moth and Other Stories*), LCB (*The Life of Charlotte Brontë*), NN (*Notes on Nursing*), RO (*Romola*), RU (*Ruth*), である。

2. ナイチンゲールの呼称は「ランプを掲げるレディ」(a lady with a lamp) が一般的であるが、『タイムズ』紙基金の代表マクドナルドによる記述は“she may be observed, alone, with a little lamp in her hand”となっている(Cook, 1914, p. 237)。
3. ロングフェロウはナイチンゲールの様子を以下のように描いている。  
Lo! in that house of misery  
A lady with a lamp I see  
Pass through the glimmering gloom,  
And flit from room to room.
4. 引用中の“passions”は複数形語尾“-s”によって恋愛や愛欲の意味となるが、他の個所で女性の“passion, intellect, moral activity”(C, p. 25, 29)のことを表記する場合には“passion”と単数形である。これは恋愛絡みの意味だけではなく、女性の“passion”は行動を起こす原動力としての衝動性をも意味すると考えられる。
5. ナイチンゲールは“A ‘Note’ of Interrogation”(Fraser’s Magazine, 1873)の中で、『ロモラ』におけるサヴォナローラの崇高性を賞賛しているが、物語の中でロモラはサヴォナローラを宗教上の父と崇めていたものの、後に彼の態度に失望している。
6. 「カサンドラ」を含む『思索への示唆』は、ナイチンゲールの存命中に私家版が印刷され献上されているが、その後彼女は原稿に手を加えている。現在「カサンドラ」のテキストとして主に使用されているのは1928年版をもとにしたテキストである。
7. ナイチンゲールの伝記は多数あるが、引用頻度が高いものはEdward Tyas Cook(文献を参照)の著作の他に、Cecil Woodham-Smith, *Florence Nightingale 1820-1910* (1950)とLytton Strachey, *Eminent Victorians* (1918)がある。

- Grandmothers, and the Gendering God. Ohio State University Press.
- Longfellow, H. W. (1886). Santa Filomena. In *Birds of Passage; Flower-De-Luce; A Book of Sonnets; The Masque of Pandora and Other Poems; Kéramos; Ultima Thule and In the Harbor*. Riverside Press.
- Mitchell, J. (2000). Femininity, Narrative and Psychoanalysis. In David Lodge and Nigel Wood (Eds.), *Modern Criticism and Theory: A Reader* (2nd ed.). Longman.
- Nightingale, F. (1873). A ‘Note’ of Interrogation. *Fraser’s Magazine*, VII (XLI), 567-77.
- Nightingale, F. (1979). *Cassandra*. Feminist Press.
- Nightingale, F. (1999). Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not. (1st ed.) In Lori Williamson (Ed.), *Florence Nightingale and the Birth of Professional Nursing*. Vol. 1. Thoemmes Press.
- Rignall, J. (ed.) (2000). *Oxford Reader’s Companion to George Eliot*. Oxford University Press.
- Showalter, E. (1981). Florence Nightingale’s Feminist Complaint: Women, Religion, and Suggestions for Thought. *Signs*, 6 (3), 395-412.
- Uglow, J. (1993). *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber.
- Uglow, J. (2008). *George Eliot*. Virago Press.
- Woolf, V. (1947). *The Death of the Moth and Other Essays*. Hogarth Press.
- Woolf, V. (2012). A Room of One’s Own. In *A Room of One’s Own and the Voyage Out*. Wordsworth.

(受稿日 平成28年8月29日)

(採用日 平成29年1月30日)

## 文献

- Chapple, J. A. V., Pollard, A (Eds.). (1997). *The Letters of Mrs Gaskell*. Mandolin- Manchester University Press.
- Cook, E. (1914). *The Life of Florence Nightingale*. 1913. Vol. 1. Macmillan.
- Eliot, G. (2005). *Romola*. Dorothea Barrett (Ed.). Penguin.
- Gaskell, E. (1985). *The Life of Charlotte Brontë*. Alan Shelston (Ed.). Penguin.
- Gaskell, E. (1989). *Ruth*. Alan Shelston (Ed.). Oxford University Press.
- Houston, G. T. (2013). *Victorian Women Writers, Radical*



## Nightingale's Vision—a Female Christ and the Dying Woman

Masako Kimura

Management in Nursing, Gifu College of Nursing

### Abstract

In contrast to the remarkable Victorian image presented by her nursing activity in the Crimean War, followed by the unflinching speech of her most famous work *Notes on Nursing* (1860), Florence Nightingale's voice in her early work "Cassandra" (1852) is characterized by an overwhelming tone. The narrator in "Cassandra," Nightingale's alter ego, raises an outcry against Victorian social conventions by claiming a rightful place for a woman's "passion, intellect, and moral activity." She even wishes for a female Savior/Christ to save her from her plight, but in vain. At last, the dying woman figure appears and says that she is willing to die for the past, not for the future. Here we have some questions: What kind of salvation or savior does Nightingale long for? Does she give up a place in this world? What does her death mean? Is death related to salvation for her? Does it represent a stance for or against Victorian society?

In order to find answers to these questions, this paper explores the two visions presented in "Cassandra": "a female Christ" and "the dying woman." As evident from earlier studies, it is not Nightingale alone who has the idea of a female savior. Some other nineteenth century women writers also depict a female savior or a savior of women in their work. This paper focuses on heroines from Elizabeth Gaskell's *Ruth* (1853) and George Eliot's *Romola* (1863); the former is a fallen woman, an object to be rescued and protected, while the latter takes a leading part in the relief work in a strange village. As the endings of both novels show, the writers cannot tell their heroines' stories beyond the literary conventions of the time. *Ruth* dies of an epidemic disease; her death, however, can be interpreted as her salvation from disgrace and suffering in this world. *Romola's* action is admitted only outside her hometown, so that she finally decides to give up her activities and return to domestic life.

In "Cassandra," Nightingale shares the same view as *Ruth*. In the end, a woman is to die as a victim of the conventions, but keeps her faith. But in *Notes on Nursing*, she refuses to be silent and warns an attendant or nurse to be careful not let the "murderers" (sickness) into the room. Her uncompromising attitude is like that of *Romola* in a strange village. Nightingale seems to gain the art of persuasion and direction through her experience in the barrack hospital during the war time. The vision of "the dying woman" in "Cassandra," in a way, means the death of the "Angel in the House." Prior to Virginia Woolf's declaration about killing the "Angel," Nightingale decides to do so. Therefore, "Cassandra" is not a requiem but a prelude to Nightingale's activities in the Crimean War.

**Key words:** Nightingale, "Cassandra," *Notes on Nursing*, female savior, dying woman